

認知的エスノグラフィーの問題性

日常の実践は、ありふれたもの、つまり、あらゆる場所で現実に行なわれている日々の行為である。しかし、それは高度に複雑なものであり、素朴な接近を拒むものである。実践を記述し説明可能にすることは、高度な理論的な構えを必要とする。実際にさまざまな現場で行う参加観察が、認知的エスノグラフィーの最低条件となる。アパシーに陥らずに、それを続けるためにも、理論的な議論の軸に配慮することが必要だろう。

たとえば、聞く、書く、読む、話す、などの言語行為を最大限の細かさで記録しても、言語実践のエスノグラフィーにはならない。別の側面、別のレベル、別の記述の細密さを発見することが可能である。加えて記録のテクノロジーの開発が、加速的に細密さをもたらしめている。それよりも、実践を可能な限りの細密さで記述するとき、それはメタ言語実践とでも言うべき「悪無限的」事態を招くだろうから、それは目指す言語実践とは別に探究の対象を形作るにちがいない。いずれにせよ、記述の細密さという素朴な接近は、何らかの理論的な構えを担保としないかぎり、何の価値もないだろう。

説明の原理の問題性

ひたすら細かに記述しても、それは認知的エスノグラフィーにはならないだろう。記述には説明の格子が必要であり、その格子ごとに見えるもの、あるいは見えないものをおして、説明の成否がはじめて特定できるだろう。

今回のシンポジウム登壇者の説明のグリッドは多様である。

佐伯氏は、「わたしであること」あるいは人格・アイデンティティーの軸を強調される。主観性あるいは主体の格子は、人間のエージェント性に直結する。

それに対して、無藤氏は、状況に多数ある対象物に注目し、対物的な交渉と対象に媒介された交渉の軸を強調される。

石黒・上野両氏は、社会的な過程を強調する。石黒氏は園・学校、地域社会、日本文化と外の文化といった、重層的な関係性に注目し、社会歴史的にリアルな状況性を強調する。

上野氏は、行為者の会話と相互行為に注目する。道具の使用や測定と言った知的行為が、どのように達成されるのか、その社会的でミクロなプロセスを重視する。

コンテキストの解明

参加者のいずれのかたにも共通する指向性は、コンテキストの解明にあると思える。

実践を記述可能＝説明可能にすることは、コンテキストを描出可能にすることにほぼ等しいだろう。しかし、従来、コンテキストは無視されるか、せいぜいのところ不動のシステムとしての認知の、付属的な要因かあるいは不動のシステムの入れ物として理解されてきたに過ぎない。

実践は、対象、アーチファクト、身体、交通そして行為といった多数のモメントから成立する。

これらのモメントはコンテキストの中で意味を持ち、同時にこれらのモメントがコンテキストを形成するというリフレクシブな関係を構成する。

コンテキストを記述＝説明可能にするということは、このリフレクシブな関係の内部にとどまりながら（ということは、閉じた認知メカニズムや非歴史的な心理カテゴリーといった超越的なものを持ちださずに）記述を徹底することともいえよう。それには、まず多数のモメントが作り上げる行為の編成を明らかにすることであり、次に、その行為の編成を歴史的に再構成することであろう。

実践は多数のモメントのユニティー（分節された対立的モメントの結合）である。このユニティーを提供するのが行為である。行為は、社会への還元と個体への還元をこえて、〈人間の能動性＝環境による被制約性〉の分析への手掛かりを与えるだろう。また、行為は、対象・アーチファクトと行為の間の複合的かつリフレクティブな構成をさらに複合的にするマトリックスである。

コンテキストの解明には歴史的、発達の観点が必要である。それは行為の編成に分け入るための視点を提供する。たとえば、教師と子ども、書きことばと話しことばといった、歴史的なカテゴリーに注目して、それらがどのように複雑な構成に発達しているのかを明らかにする、といった方向性が考えられる。